

Title	『元朝秘史』における漢字音の研究
Author(s)	Burigude
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49464
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	BURIGUDE ^{ブルグド}
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 23230 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	『元朝秘史』における漢字音の研究
論文審査委員	(主査) 教授 角道 正佳 (副査) 教授 佐々木 猛 教授 岸田 文隆 教授 藪 司郎 大阪外国語大学名誉教授 橋本 勝

論文内容の要旨

本稿は、『元朝秘史』（以下『秘史』）におけるモンゴル語を表わす漢字表記の音声的な特徴を解明することを目的とし、次の二つの疑問点を出発点として、考察を行ったものである。まず、服部四郎1946が示すように、『秘史』の漢字音は、『中原音韻』（以下『中原』）の音系と完全に一致するかどうか。また、『秘史』の音訳者は如何なる中国語方言音に基づき、モンゴル語の音声に対応させる字音を選択し、如何なる原則に沿って表記したかという二点である。

『秘史』漢字音に関する唯一の系統的な研究は服部1946『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』である。氏の研究には、以下のような問題点存在する。

①字音を推定する過程、根拠を記述した下編の2章から12章までの部分が、戦火に焼かれ、現在存在しないことが残念である。

②『秘史』漢字音の基礎音系を判別する方法として、濁音声母の用法だけを検証している。厳密に言えば、この方法は濁音声母を保有している「存濁方音」と濁音声母が消失した「失濁方音」の判別には有効であって、事実上、「南京音」の可能性を否定できる有効な方法ではない。

③方言音の判別に欠かせない中古入声字の用法を全く検証していない。

これらの問題点は上述した疑問を解決する糸口になる問題である。本論文は服部1946に存在する問題点を焦点とし、次のような検証を展開した。

本文の第一部では、本来ならば、服部氏の下編本論の2章から12章までの部分に含ま

れる内容である字音の検証を行った。『秘史』に使われた563字の漢語音韻資料における有様を検証し、『秘史』における再構漢字音を一字ずつ決定した。その際、『秘史』漢字音を(C)+V音連続、(C)+VV音連続、(C)+V+n音連続、(C)+V+m音連続、(C)+V+ng音連続、音節末子音という六つグループに分類し、六つの章に分けて検証した。字音検証に使用した中国語音韻資料は『中原』、『洪武正韻』（以下『正韻』）、『西儒耳目資』（以下『耳目資』）、『広韻』である。

『秘史』の漢字音の音系は大体『中原』が表す北方音であるとされている。当時の北方音を代表する韻書として『中原』が典型的であるという説がある。本論文では、『中原』を一つの基準として、モンゴル語との対応関係の検証し、漢字音の『秘史』における再構音を決定した。『中原』以外の韻書における有様も検証する際、『秘史』が音訳された時代とかなり近い『正韻』、また明末の官話音系を代表し、ローマ字表記が付けられている『耳目資』を参考にした。さらに、中古音の姿を把握するために『広韻』を取り上げる必要があった。

『秘史』の音訳された時代を考え、『秘史』より少々古い時代の資料として『中原』、同時代の資料として『正韻』、後代の資料として『耳目資』を取り上げることによって、『秘史』の音訳当時の音韻体系をより正確に把握することができるのではないかと思う。

第一部では、上記の作業のほか、漢字音の『秘史』における用法、出現頻度や出現箇所などを検証し、漢字音の表記原則や表記特徴を分析した。この作業は主に筆者が作成した『秘史』語彙リストによるものである。

この第一部で行った字音の検証、用例の検証の分析結果を第二部にまとめた。

第二部の第一章では、漢字表記の分類および書き分け原則について記述した。

漢字自体の特徴から『秘史』に使われた563字は大きく三つの種類に分類することができる。

- ① 漢字をそのまま用いる単純な漢字表記：「阿」「蒙」などの如く。
- ② 「小字」要素を加える複合漢字表記：「^中合」「阿^里」の如く。
- ③ 創作した新たな漢字による表記：「^羊呈」「^声響」の如く。

漢字音の表わすモンゴル語の特徴による分類には、四種類ある。

- ① モンゴル語を表す最も広い範囲で使われる代表字：「納」「塔」の如く。
- ② モンゴル語の意味を字形、字意に反映する語意表記字：「衲」「踢」の如く。
- ③ モンゴル語の語尾、形態素の表記に用いる形態表記字：「宜」「抽」の如く。
- ④ 固有表記に用いられる固有表記字：「撫州」「趙官」などの如く。

上記の四種の分類は、基本的にモンゴル語の同一音連続を表し、『秘史』では同音として用いられた字のグループに限定するものである。

同音漢字音の書き分け原則に関して、以下のような傾向があることが分った。

- ① 表意のための書き分け
- ② 形態素の書き分け
- ③ 男性語女性語の書き分け
- ④ 語頭と語末(語中を含む)の書き分け
- ⑤ 固有表記による書き分け

第二部の第二章では、第一部で決定した再構漢字音と『中原』の韻類との対応関係

を分析した。その結果、以下のような整然として対応関係を有することが明らかになり、『秘史』漢字音は『中原』の音系とほぼ一致することが分かった。その対応関係は次の通りである。

モンゴル語の(C)a音連続と対応するのは、13家麻韻のa韻母で、(C)e音連続と対応するのは14車遮韻のie韻母、(C)i音連続と対応するのは4斎微韻のi韻母である。(C)o/ø音連続と対応するのは三種類の韻類で、12歌戈韻のo韻母とuo韻母、11蕭豪韻のie u韻母、14車遮韻のiuε韻母である。このような、複雑な対応になったのは、モンゴル語の男性語、女性語を書き分ける目的があったからである。12歌戈韻は男性語、女性語を区別せずに表記しているが、11蕭豪韻は男性語のみ、14車遮韻は女性語のみを表記している。(C)u/u音連続と対応するのは5魚模韻のu韻母とiu韻母、16尤侯韻のia u韻母である。16尤侯韻のia u韻母は、モンゴル語の副動詞語尾ε u/ε ü, ju/jüのみを表記し、他のモンゴル語のε u/ε ü, ju/jüという音声の表記と区別するために用いられたと考えられる。

モンゴル語の二重母音の対応は次の通りである。(C)ai音連続は6皆来韻のai韻母、(C)ei音連続は4斎微韻のei韻母と対応し、(C)oi/øi音連続は6皆来韻のuai韻母と対応し、(C)ui/uiは4斎微韻のuei韻母と対応する。(C)au音連続は11蕭豪韻のau韻母、(C)eu音連続は11蕭豪韻のie u韻母と16尤侯ε u韻母と対応し、(C)iu/iu音連続は16尤侯韻のia u韻母と対応する。

モンゴル語の(C)+V+C音連続の対応は次の通りである。(C)an音連続は8寒山韻のan韻母、(C)en音連続は10先天韻のie n韻母、(C)in音連続は7真文韻のia n韻母、(C)on音連続は9桓歡on韻母、(C)un音連続は7真文韻のua n韻母とiuε n韻母と対応する。(C)am音連続は18監咸韻のam韻母、(C)em音連続は19廉纖ie m韻母と18監咸韻のam韻母と対応し、(C)im音連続は17侵尋韻のia m韻母と対応する。(C)ang音連続は2江陽韻のaŋ韻母、(C)eng音連続は15庚青韻のə ŋ韻母と2江陽韻のiaŋ韻母と対応し、(C)ing音連続は15庚青韻ia ŋ韻母、(C)ong音連続は2江陽韻のuaŋ韻母、(C)ung音連続は1東鐘韻のuŋ韻母とiuŋ韻母と対応する。

第二部第三章では、『秘史』漢字音の基礎音系について二つの視点から討論を展開した。

まず、モンゴル語(C)+o/ø音連続を表記した『中原』の十二「歌戈」、十一「蕭豪」、十四「車遮」韻に収録されている漢字音の『秘史』における用法を検証した。

モンゴル語の(C)+o/øの音連続を表わした漢字は、「12歌戈」韻の字は男性語、女性語を区別せずに表記していることに対し、「11蕭豪」韻の字は主に男性語を表記し、「14車遮」韻の字は主に女性語を表記している。『秘史』では「12歌戈」、「11蕭豪」の両方に収録されている字あり、「12歌戈」韻の字は文読で、「11蕭豪」韻の字は白読である。仮に、『秘史』の漢字音が南京音に基づいたとすれば、「11蕭豪」韻の字は、「12歌戈」韻と同様な音声を持つため、「12歌戈」韻の字と同様に、男性語、女性語を区別する必要はなかったと思われる。しかし、男性語と女性語を区別して表記していることから、『秘史』では、「12歌戈」、「11蕭豪」両方に収録された字を「12歌戈」韻の文言系統の音と異なる白話系統の音で使われていたと推測できる。これを立証できるのは、元曲の押韻の実態である。寧継福1991は、中古宕江摂の字は13-14世紀の大都方言では、基本的

に「11蕭豪」の韻で読まれ、「12歌戈」の韻で読まれることは極めて少ないと指摘している。この点で、『秘史』の漢字音は『中原』の音系と一致し、当時の元曲の押韻実態とも一致するのである。これは、『秘史』の漢字音の基礎音系は『中原』が表わす北方音であるということを示している。

次に、北方官話区域の中で、南京音と北京音の判別に最も有効的である中古梗曾撰一等、二等字の『秘史』における用法を二つのグループにわけて検証した。

中古曾梗撰の入声字である「白、伯、索、澤、北、克、國、塞、德、」をグループIとし、その用法を検証してみると、モンゴル語の(C)+V+i音連続を表記していることが判る。佐藤(1979)は、曾・梗二撰と現代北京白話音との間に、曾撰→北京-ei、梗撰→北京-aiという対応関係があることを指摘している。上述した9字の中、中古曾撰の字である「北、克、德」の3字は、モンゴル語の(C)+eiを表記し、北京白話音の-eiに対応でき、中古梗撰の字である「白、伯、索、澤」の4字はモンゴル語の(C)+aiを表記し、北京白話音の-aiに対応できる。要するにモンゴル語の(C)+重母音の表記に用いられた中古曾梗二撰の字は、現代北京語の白話音と対応できる。

一方、中古の梗撰の字である「額、客、格、赫」をグループIIとし、用法検証を行った結果、モンゴル語の(C)+V音連続を表記していることが分かった。一見、北方白話音系では解釈できなく、南京音のように思われる。しかし、この四字は『中原』では「格」字以外の三字は「車遮」韻にも収録されている。この「車遮」韻に関して、薛鳳生1981は、「皆來」韻の音が主要母音と韻尾の融合によるものであり、文言音由来ではないと指摘している。そうであれば、この三字は白話音である「皆來」韻の韻母が融合した結果、モンゴル語の(C)+eの音価に近かったため、表記に用いられたのであり、文言音に基づいた表記ではないことになる。

上述の中古入声字以外、韻書から確認できないが、現代北方官話方言では、明らかに白話音系統の字例を取り上げ、『秘史』の漢字音には白話音系統の要素が顕著に現れることを立証した。さらに、字の音声面だけではなく、字形の選択からも、白話的要素が見られることにも言及した。

まとめると、『秘史』の漢字音は、『中原』が表わす北方音系に基づいたと言える。『秘史』に見られる白話系統の音が現代北京語の白話音と大変類似していることは、『秘史』漢字音の基礎音系は、明初期の北京音である可能性を示しているのではないかと考えられる。

論文審査の結果の要旨

当初の目的

本論文で扱われている『元朝秘史』はモンゴル語を漢字で書いたもののみが残っている資料であり、そこに用いられている漢字音の研究をすることによって、当時のモンゴル語の実態が明らかになるのみならず、漢語音韻史にも寄与することが期待されるものである。当初、漢字の声調がモンゴル語の表記に反映されているのではないかと予想を持って研究に挑んだものの、明確な成果は得られなかった。

先行研究

『元朝秘史』に用いられている漢字音の研究は、服部四郎(1946)『元朝秘史の蒙古語を表はす漢

字の研究』によってつくられていた可能性があるが、最も重要な漢字音の再構の部分が戦火によって失われ、本人によって生前には再現されなかった。これを再現しようとした試みとして、越智サユリの研究があるが、漢字音の対応のさせ方に問題があり、すっきりとした形では結論が出ていなかった。本論文はこの欠点を補った意味で価値の高いものである。

本論文の目的

本論文の主たる目的は、『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』の失われた部分を再現することである。『元朝秘史』に用いられている漢字音を検討する際に最も重要な韻書は『中原音韻』であるため、一字一字の漢字が韻書のどこに所属しているかを調べ上げ、その音を推定する作業を行い、『中原音韻』 がない漢字については『廣韻』等の別の韻書の所属から推定音を決定した。この作業には、漢語音韻史の正確な知識が不可欠であるが、それを十分に生かした上で、納得のできる結論に達している。

本論文が明らかにしたこと

第一点

『元朝秘史』を表した漢語の基礎方言が北方系であり、しかも白話音が反映されているという点である。この部分については日本モンゴル学会紀要に研究ノートが掲載されており、その後、この研究を読んだ中村雅之よりWeb上で名指しで反論がなされた。中村氏の説は基礎方言が南京方言であるというものであるが、その反論を批判的に論じ北方方言が基礎方言であるという主張には揺るぎがないものと思われる。文言音・白話音の体系・構造の正確な把握には若干もの足りなさが感じられるものの、一部に白話音が現れているという指摘は否定できない事実である。

第二点

円唇母音の一部にモンゴル語の男性母音・女性母音の違いが反映されているという事実をつきとめたことである。この事実の発見は、万葉仮名に甲類、乙類の二種類の母音の書き分けがあったという発見ほどではないにしても、それに匹敵する、現在まで指摘されていなかったことがらである。

本論文が提供したデータ

モンゴル語の意味を反映するために創作された新しい漢字、及びモンゴル語の意味を字形や字意(字義)に反映する表意字を含む語を網羅的に示した。

本論文は468ページに及ぶ大作であり、論文の主要な部分である漢字音の再構には、周到な調査の結果を示す335ページが費やされている。

本論文が明らかにした第一点の内容に関わる文言音・白話音の違いやそれらの体系についての考察には今後の研究が期待されはするものの、本論文の価値を下げるものではない。また第二点についても、藤原定家の仮名遣いに見られるように、ごく一部にのみ使い分けがなされているという現象はありうるものと考えられるため、本論文で発見された事実は微々たるものであるが、事実として受け止めるに足る結果を提示している。

5名の審査委員は本論文を慎重に審査した結果、上記の理由により本学において博士(言語文化学)の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと全員一致で判断した。